

新渡戸稲造を支えた祈り

——祖父、新渡戸稲造の思い出を振り返って——

加藤 武子

聞き手：佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長

佐多：加藤さんと初めてお目にかかりましたのは1996年のことでした。95年にギリシアの現役政治家、ヴィロン・ボルドラス氏が、新渡戸稲造先生の『武士道』をギリシア語に翻訳して出版された(※1)ことを新聞で知り、そのことで彼にお手紙を差し上げたところ、驚いたことにすぐにギリシアのアテネからお電話がかかってきました。なんでも、ギリシアにある日系企業200社近くにご本をプレゼントされたそうですが、手紙をもらったのは私からが初めてだと、大変喜んでいらっしゃいました。そうしましたら、その次の彼からの手紙の中で、新渡戸先生のお孫さんで加藤武子さんという方がまだご健在なので、ぜひお目にかかってはどうかとご紹介を受けました。

先生のことは小さい頃から尊敬しておりましたので、今日は新渡戸先生の思い出について伺いできることを楽しみにしておりました。加藤：ありがとうございます。祖父についての初めての思い出といえばこんなことがありました。祖父は、1919年にお弟子さん5人をつれて欧米視察に出発しました。最後にロンドンに到着したのですが、急遽国際連盟に事務次長として就職が決まり、帰国できなくなってしまったのです。国際連盟はジュネーブに本部があったと知られていますが、当時はロンドンに仮事務所がありました。私は翌年1920年に生まれたのですが、祖父とはしばらく会えずじまいでした。関東大震災が起こり、その知らせを受けて8ヵ月後に帰国した祖父に初めて抱き上げられ頬ずりされて、ひげ跡が痛いあと感じたことが今でもまざまざと思い出されます。4歳のときのことでした。

佐多：2年前の秋には、ご主人の英倫様共々盛岡までご一緒させていただきました。その折、フィンランド駐日大使もご出席の夕食会が開かれましたが、非常に貴重な事実を私は知ることができました。

フィンランドとスウェーデンにはさまれたバルト海にあるオーランド島は、もともとフィンランドと共にスウェーデン領だったのですが、スウェーデンがロシアに敗れてロシア領となりました。その後ロシア革命によりフィンランドが独立したことをきっかけに、フィンランドとスウェーデンの間でオーランド島の領有権をめぐる紛争が起こり、国際連盟に調停を頼んだわけです。その調停役の責任者だった新渡戸先生が、領有権をフィンランドに与え、公用語はスウェーデンとして高度な自治政府を認められました。今でも領土紛争解決のモデルケースとして、実に見事な新渡戸裁定との称賛を



加藤 武子 / かとう・たけこ

1920年生まれ。東京都出身。新渡戸稲造氏の孫にあたる。

新渡戸稲造氏ゆかりの著書や写真、書類を多数所蔵する傍ら、新渡戸稲造氏の研究を続ける。新渡戸稲造氏の英文『日本文明における外来の二潮流』『国際連盟の業績と現状』『幼き日の思い出』『エルキントン家宛書簡』などの翻訳を手がける。新渡戸稲造全集19巻と22巻に収録。

得ていることを知りました。我が国の北方領土問題にもこの方法は適用できるのではと、そのときからよく頭に浮かびます。このような国際的な活躍をされた他にも、新渡戸先生は実に様々なお顔をお持ちでいらっしゃいますね。

加藤：そうですね。祖父が亡くなった後、ジュネーブで祖父が書いた『幼き日の思い出』という本を出版することになったのですが、その端書きに祖母メリーが、「新渡戸稲造という人は、色々な苦しみや困難に遭うたびに目を見はるような成長をする。それで私は日々驚きを隠せなかった」と書いているのです。私が子供心に感じた祖父の印象もそれに通ずるものがあります。満州問題を調べるためにリットン卿が日本に乗り込んでこられたときも、周囲の者がなんとなく不安そうの中で、祖父だけが毅然としていました。

佐多：非常に信念を持っておられる方だったのです。また信仰心も厚い方であられました。

加藤：熱心なクェーカー教徒(※2)でした。私はいつも「なにがあっても、おじいちゃんは大丈夫だ」という気持ちを強く持っていて、後年、なぜそれほどまでに祖父を信頼したのだろうと考えてみたことがあります。

当時昼食後は祖父が昼寝をするから静かにするようにという規則があったのですが、遊んでいるうちに祖父の書斎に入ってしまったことがあるのです。祖父は机の前に端座して、目をつむっていました。直感的に「これは祈っているお顔だ」と感じた私は、すぐに書斎を飛び出しました。父と早くに別れたため、祖父が父の代わりであり、祖父がこの世で一番偉いと思っていた私は、祖父がさらに上なるものに対して敬虔な祈りをささげていることに強い感銘を受けました。カーライル(※3)もまた、この世で一番偉いと感じていた母が敬虔な祈りをささげている場面に何度か遭遇し、母より上なるものが存在するということを自覚されたそうです。それが信仰心を深めるきっかけになったと語っています。

佐多：加藤さんご自身はクリスチャンでいらっしゃるのですか？

加藤：クェーカーの家に生まれ育ちましたので、思考は祖母の影響を受けていました。クェーカーでは洗礼をしないのですが、16歳のときに、なぜか自ら教会で洗礼を受けました。しかし教会にはほとんど行っていない。幼いときからの習慣ですから、嫁ぎ先でも食



「小日向会」定例会にて

新渡戸氏に直接つながりのある方々の手により発足し、現在では会員の枠を氏の研究者・敬慕者などにも拡げている。「小日向」とは新渡戸氏の自宅があった地域名からきている。
連絡先：国際文化会館 企画部（担当：柏） 〒106-0032 東京都港区六本木5-11-16
TEL: 03-3470-3211 FAX: 03-3470-3170

前にお祈りをしたのですが、義父に「なんだ、アーメン！ソーメンが！」と一喝されてしまいました。私はふざけているのかと思って笑ってしまったのですが、仏教徒の目には奇異なものに映ったのでしょうか。次第に教会に行くことも遠慮するようになりました。

佐多：日本人の反応はみなそのようなものかもしれませんね。宗教というのは自分を謙虚にさせます。それが大事だと思うのですが、日本では個人の信仰に関して混乱があって、経済的に成功したときにそれ以上の段階に進めなかった大きな原因がここにあると思うのです。精神的なものを日本人も持っていると思うのですが、ちゃかしてしまうところがある。ブッシュ大統領やクリントン元大統領でも、人間である限り間違いは起こすけれども、敬虔なクリスチャンとしての顔があって、人間としてこうありたいという共通の認識というか、理想を持っているわけです。日本人は、現世御利益があればそれでいいとばかりに、一生をかけて持つ個人としての理想や信仰心が希薄な気がします。パリのノートルダム寺院でコインを投げて拍手を打ち、仲間に注意されたという弊社員がいたらしいのですが、意外とこういう日本人は多いのではないのでしょうか。

加藤：日本には精神的なものを受け入れにくい土壌があるのでしょうか。

佐多：それからやはり日本はルネッサンスを経験していないので、個人の解放がなされていないということもあるでしょうね。個人が自立していないから、いつまでたっても「共同体」の論理に甘んじてしまう。個人としての宗教が根づかないのもそのせいではないでしょうか。だから新渡戸先生のような方は私には理想なのです。5千円札の人物だという程度の認識だけではなく、新渡戸稲造という立派な目標とすべき人物がいたことを、日本人にはもっともっと知って欲しいと思います。

加藤：祖父については、活動してきたことばかりが書かれていて、内面について触れているものはほとんどありません。祖父は常に祈りに支えられている人でした。生徒一人を教えるときでも、「今日教える子供たちに少しでも知識を分かつことが出来ますように」と、祈りと謙虚な気持ちを持って教壇に立っていたそうです。

佐多：すばらしいエピソードですね。まさに新渡戸先生そのままという気がします。家庭では厳格な方であられたのですか？



鎌倉の別荘にて

（中央：新渡戸氏の膝に抱かれているのが加藤氏）

加藤：父や兄には厳しかったようです。祖母メリーは第一子を難産で亡くし、子供を産めない体になりました。父は養子として迎えられましたが、日本とアメリカの架け橋になれるようにと期待されて、6歳から大学卒業までをアメリカで過ごしました。帰国してからはジャーナリストとして活躍しましたが、どうしてか放蕩息子になって、祖父から勘当されてしまったということがあります。私は父のよい面も見てきたので悪いことばかりは言えないのですが、祖父にしたらさぞかし期待を裏切られたという気持ちが強かったことでしょう。

それにしても、私にはとても優しい祖父でした。風邪をひいても、病院まで手をひいて連れていってくれるのはいつも母ではなく祖父でしたし、寝ているときに布団をかけ直してくれるのも祖父でした。

こんなこともありました。祖父の家は当時としては和洋折衷の立派な建物だったのですが、内村鑑三先生が訪ねてこられて「こんな贅沢な家に住んでいて、新渡戸くんのために嘆く」とおっしゃられたことがあります。しかし、祖父はなにを言われてもにこにこしていました。後年、祖父の日記を調べていて分かったのですが、その家は祖母であるメリーのアメリカの実家と似たスタイル、同じ規模なのです。遠い異国の地にメリーを連れてきて、なおかつ初めの子を難産で死なせてしまったことの責任も感じていましたから、メリーのことを本当に大切にしていました。だからメリーが自分たちの生活にふさわしい住まいとして満足さえすれば、誰になんと言われようとも全く平気だったのです。

佐多：祈りを知っておられる方の優しさと強さの表われですね。私はもっと新渡戸先生のことを知りたいと思い、現在「小日向会」の会員として、毎年先生のご命日の10月16日に開かれる定例会に出席させていただいております。1933年にカナダのビクトリアで先生が亡くなられてから、今年で68周年になられるのですね。「小日向会」のように、先生の残された精神を引き継いでいくような活動はとても意義があると思います。

加藤：もっと多くの方に祖父のことを知っていただけるよう、私も活動を続けていきたいと思っています。

（*1）Vitalite 20参照。

（*2）キリスト教プロテスタントの一派。アメリカ人の妻メリー夫人もクエーカー教徒。

（*3）イギリスの評論家・歴史家。

ゆいしき 「唯識」という生き方(1)

横山 統一



横山 統一 / よこやま・こういつ

1940年、福岡県生まれ。70年、東京大学大学院印度哲学科修了。現在、立教大学教授。
著書に、『唯識の哲学』『唯識とはなにか』『「唯識」という生き方』『唯識・わが心の構造』
『牛園・自己発見への旅』など。

私事の紹介からお話をはじめて恐縮ですが、私は3年前に奈良の興福寺で得度を受けました。この得度に至るまでの私の心の遍歴をまず述べさせていただきます。

私は小学校1年のとき、大分市の市内にある万寿寺という禅宗の専門道場の門前に移り住みました。引っ越してから数日後、どういふきっかけだったか分かりませんが、お寺で頭をクリクリと剃ってもらい、リンゴを1個もらって帰ってきた記憶があります。考えてみると、正式ではないにしても、子供のときにすでに1度剃髪をしたことがあったのです。それ以来、寺の中で可愛がられ、多くの時間を寺で過ごすことになりました。当時終戦直後ということもあって、僧侶の数も少なく、修行もそれほど厳しいものではなかったようで、僧侶の方々によく一緒に遊んでもらいました。当時は大西和尚という方が住職をされていましたが、両眼がかなり離れた容貌のため、「金魚の坊さん」という愛称で親しまれていました。

厳しい修行生活ではなかったようですが、それでも時には僧侶の方々が禅堂で坐っている姿を垣間見ることがありました。子供の私にはそれがなんであるか分からず、ある日、和尚に「なぜあのようになに坐っているの」と尋ねると、和尚はそれに直接答えず、答えは「こんどわしが部屋で坐っているとき、襖を開けてみる。すると部屋の真ん中に松が1本ドーンと植わっているぞ」という言葉でした。「えーっ、そんな馬鹿な」と思いましたが、しかし、あのように坐るといふことは、なんと凄いのなのかと子供心に思いました。

その和尚の一言が私の深層心に深く強く植え付けられ、それが、その後青年になって禅の修行を始め、そして最終的に剃髪するに至った最初の動因であったと今では思っています。他人から聞いた一言、それが人生の方向を決める大きな力になることを私は私自身の経験から知ることができました。

仏教の「唯識」という思想では、人間の意識を变革する力の1つに「正聞熏習もんくんじゅう」があると説きます。それは正しい師から正しい言葉を繰り返し聞き、その言葉が深層の心の中に熏じつけられ、深層に潜んでいる素晴らしい種子にいわば肥料を与えてそれを成育せしめるという考えです。大西和尚のあの一言は、私にとってまさに「正聞」であり、その後その言葉が繰り返し私の心の中に生じてきたことは「熏習」であったといえるでしょう。

この体験が私が得度する最初の縁であったとすれば、第2の縁は次のような体験でした。中学校1年のときの1年間、原因不明でしたが3度ばかり意識を失って倒れたことがありました。その最後に倒れて、そして意識を回復し、寝ている部屋の格子戸から差し込んでくる夕日を見た瞬間、「いったいなにか」という声が叫びのごとくに心の中に生じてきたのです。今までにない疑うことなく当然あると思っていた存在すべてが、いわば瓦礫のごとくに崩れ去り、得体もされない恐怖感、虚無感が心底から突き上げてきて、それが「いったいなにか」という言葉となって噴き出ししてきたのです。

その後もそれほど強烈ではないにしても、その気持ちは繰り返し私を襲い、「いったいなにか」という疑問は私の中でますます強くなっていきました。この体験によって植え付けられた「いったいなにか」という疑問は、青年になって仏教とくに禅に触れることにより、知的な、哲学的な問いとなって、私の坐禅修行の推進力となりました。

仏教に「発心」という言葉があります。発心とは詳しくは「発菩提心」といい、「菩提を得ようとする心を発する」という意味です。その菩提とはサンスクリットのbodhi(ボーディー)の音訳で、「悟りの智慧」という意味です。「いったいなにか」、本当に私たちは「自分」とはなにか、自分はどこから来てどこに去っていくのが皆目分かっていません。「自分」だけではありません。他人とは、自然とは、宇宙とは、広くは存在するとは、真理とはなにか、と問われたとき、これこれであると自信を持って答えることのできる人は皆無といっても過言ではありません。

これらすべてを含んで「いったいなにか」という問い掛けを背負って、よしその解決を目指して悟りを、すなわち菩提を得ようと決心することが発菩提心であり、そのように決心した人のことを「菩薩」(詳しくは菩提薩埵)といひます。

「いったいなにか」、これはホモサピエンスであればだしもが若いときから持つ問い掛けです。しかし普通人間は大人になるにつれ、いわば世俗の事柄に翻弄されて、人間のこの根本的問い掛けを忘れてしまいます。「自分」「自分の家族」「自分の会社・地位」というように、「自分」「自分の」という思いと言葉に振り回されて、「自分とはいったいなにか」という問い掛けを忘却してしまうのです。だから「人生いかに生きるべきか」と問い掛けはしても、その主人公であ

る「自分」がなにものかと追求せず、いわば操り人形のごとく振り回されて生きるところに、迷いと苦しみとが生じることになるのです。

「いったいなにか」、この問い掛けは、私にとっては上記のごとく強烈な体験によってはじまりましたが、それが強烈であったからこそ、前の和尚の一言と同じく、私の深層心にその問い掛けが根付き、それが後の禅の世界に飛び込むもう1つの動因となったのではないかと思っています。

仏教に、そして禅の世界に飛び込むもう1つの、そして直接の動因は、大学に入ってから起こりました。それは、だれしもが大なり小なり青年期に持つ「自分への執われ」でした。当時私は人前で話すことが苦手で、いつも他人の中に入っていけないのではないかと、という思いに苦しんでいました。そのように執われた小さな「自分」をなくして、もっと大きく自由な「自分」に成りたいという思いから、大学の1年のとき、思い切って鎌倉の円覚寺内にある居士林という一般者向けの禅道場に飛び込み、1週間ばかり坐禅を中心とした生活をしました。初めの日、指導の僧侶の方から、「なにをするにしても無一無一と成りきってみる」といわれ、人間本当に苦しむと素直になれるもので、その言葉に随ってとにかく無に成るべく頑張りました。そして1週間たって横須賀線に乗って東京に帰るとき、の体験を私は今でも鮮明に思い出すことができます。それまで苦しかった思いが薄らぎ電車の窓から見える風景が明るく輝き、車内の人々も笑っているように見えたのです。わずか1週間ばかりでしたが、なにかに成りきって行動することが、これほどに人間の心を変えるものかと、禅の修行の素晴らしさを初めて自ら体験しました。

「唯識」に、表層の心のありようはかならず深層の心に影響を与えるという思想がありますが、今この教理に基づいてあの居士林での体験を分析すると、わずか1週間の私の成りきる行為が、私の深層心から汚れを除き、幾分なりとも清らかにし、私の不安を少なくしたのであるといえるでしょう。

とにかくこのように、小学校のときの「いったいなにか」という問いの発生と、大学時代の「自分への執われ」に苦しむという2つが動因となって私の中で仏教への関心がますます増大してきました。

もともと医者になることを目指して大学に入ったのですが、途中でそれを諦め、農学部の水産学科で魚の血液を研究することに

なりました。与えられたテーマは、人間が癌になると増えるといわれるハプトグロビンというヘモグロビンの1つが魚にもあるかどうかを調べる研究でした。その研究を卒論からはじめて修士課程まで続け、20種の魚すべてにハプトグロビンがあることを発見しました。この研究成果を通して私は、人間も魚も「いのち」としてはまったく同じであるということを自ら知り大きな感動を得ました。

しかし魚の血液研究に私は段々と関心が薄れてきました。「いのち」を研究したいという意気込みで当時は早朝から夜遅くまで実験室に籠もって研究を続けていたのですが、同時に禅を修することによって、魚の「いのち」しかも対象化され分析された「いのち」ではなく、この己の、自らの「いのち」を知りたいという願いが益々強まり、とうとうある日、自然科学を去りインド哲学に入り直すことを決意し、それを実行に移したのです。

この「魚のいのちの研究」から「己のいのちの追求」への転向は、私にとって正しかったし、よかったことでした。なぜ「正しかった」といえば、自らを通して自らのいのちを追求することこそ、真の意味での「いのち」研究であると今でも強く思っているからです。突然に現代的な話題になりますが、現代の遺伝子研究やゲノム解明は、遺伝子治療、食品改良などにおいては、それなりの意義があります。しかしそのみの研究で、「いのち」とはこれこれであると断定する現代の風潮に対して私は強く異議を唱えたいと思います。一番の問題は、遺伝子を研究しゲノムを解明している研究者自身が「己のいのち」のなんたるかを追求することなく、たんに分析され対象化され記号化された「いのち」の研究にのみ従事しているということです。客観化された「いのち」、それはいわば鏡のなかの像の如きものであって、鏡像ではなく鏡そのものがなんであるかを研究し追求することの方がより大切なことではないかと私は思うのです。そのような思いが前述したように私をして自然科学からインド哲学に転向せしめた原動力となりました。

また私の転向がなぜ「よかったこと」であったかといえば、仏教を学び禅を修することで、私の自己への執われが徐々に薄まり、60歳を過ぎた今、もちろんまだまだ自己を捨てきっていないものの、当時からみれば、はるかに安心し自由に生きることができるようになったからです。

激走 再び！

—創外固定をつけた自転車乗りの奮闘記—

河野 博之

2001年9月15日現地時間夜10時。

ところは、新婚旅行で訪れたベルギーの首都ブリュッセルの路上。それは、怪我との10年に及ぶ闘いに終止符を打った瞬間だった。

ブリュッセルのグランプラスからの帰路、ホテルまであと少しというところで私達夫婦は強盗団に襲われた。身ぐるみ剥がれて放り出された私が気を取り直して横を見ると、若い男が妻の鞆を奪い去ろうとしていた。とっさに私は空手の蹴りを男の首筋に叩き込み、賊を追いつめた。ホテルまで逃げ帰り、警察への通報・カードの停止手続を終えてホッと一息ついて初めて、私は、蹴りを放った足が交通事故で切断寸前までずたになった右足であったこと、そして10年ぶりに全力疾走したことによりようやく気がついたのであった。右下肢部に手を伸ばす。足踏みした。異状なし。本物の足だ！

奥多摩駅手前のトンネル内を自転車で走行中、後続の乗用車2台にたて続けに轢かれ、右足下腿部開放性粉砕骨折という重傷を負って、青梅市内の病院に救急車で運ばれたのは、今を去ること10年前の平成3年4月6日午後、春とはいえ、日差しは弱く少しばかり寒気を感じる日のことであった。当時私は26歳。年度末の残業続きで疲れてはいたが、新緑の峠道を走りたいかった。実業団チームに所属する自転車選手として、私はシーズンを迎えて張り切っていた。

それから6年。転勤先の大阪で、私は痛みに耐えながら相変わらず松葉杖をついていた。最初入院した病院で、レジン創外固定(*1)と数回の腸骨骨移植を行い、一旦は杖なしで歩けるようになったが、移植部分が偽関節化して、次第に足が湾曲していったのであった。

「これ以上会社を休めない」と悲痛な覚悟でいた私を、当時の上司が強引に入院させてくれた。会社の診療所ので紹介を受けた市立芦屋病院整形外科の大野先生の下で、偽関節部を9センチ程除去し、それによって生じた骨欠損部分に対して(株)東機質取扱のオーソフィックス式創外固定(*2)による骨延長術(Bone Transport)を施すことになった。右の図は大野先生の論文から借用した図である。人間に備わっている復元力のすごさだけでなく、「まともな骨を切る」という奇想天外の発想に驚かざるを得ない。



新婚旅行先のドイツの古城レストランにて

河野 博之 / こうの・ひろゆき

昭和39年横浜に生まれる。筑波大駒場高校・東京大学法学部を卒業後、丸紅(株)に入社。法務部に配属され現在に至る。主に不良債権の回収に従事。現在は、横浜市の自宅で妻と二人暮らし。

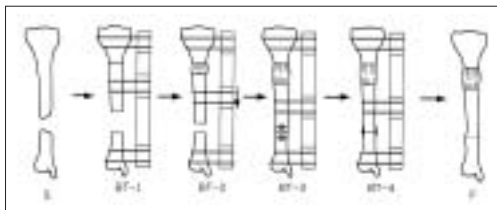
趣味は、自転車・車・空手・謡曲・骨董・史跡巡り等。

平成9年12月 手術(オーソフィックス式創外固定・骨延長器装着・腸骨移植)骨延長開始。

平成10年6月 骨延長終了(下図のBT-3)にあわせて、ドッキング部分に再び腸骨移植

平成11年7月 創外固定器除去

平成12年8月 症状固定



大野博史先生の「感染性偽関節に対するBone Transport」から

(臨床整形外科 98/3号 収録)

感染症を起こさなかったことは不幸中の幸いであったが、体質のせいか仮骨の形成は遅く一進一退であった。また、創外固定を装着した状態のまま退院して通勤もこなしていたので、おとなしくしていた人に比べると創外固定にストレスがかかっていたのだろう。歩行中に螺子を折ってしまった。今でも破片が骨に残っている。

一方、主治医とは良好な関係を維持できたと思う。弟のように可愛がっていただき、退院後に呑みに行ったり、私の結婚披露宴ではスピーチまでしていただいた。好奇心が強い私は、「別冊整形外科」「orthopaedics」といった医学雑誌を買い込んではいいろいろと質問を浴びせ、回診を長引かせたり、詰所に押し掛けたりした。病室にビールやキムチを持ち込んだり、抜釘の際に最後の一本を麻酔なしで自分で抜くと要求したり(本当にやった)、私は問題患者だったはずである。披露宴での先生のスピーチにこんな台詞があった。「怪我は治せても、性格は直せなかった」

さて、レジン式とオーソフィックス式の両方を経験した異質な患者として「創外固定」への要望・期待等を述べたい。

創外固定の場合、荷重が可能になれば、歩くだけでなく自転車



事故直後のもの



Bone Transport途中



ドッキング時



症状固定時



奥多摩にて

に乗ったり車を運転したりすることができる。筋力の低下・関節の固定を防げるとともに、早く社会復帰できる。骨欠損にも対応できる。見た目はグロテスクだし消毒の手間がかかるが、実際には患者の苦痛は少ない。ギプスのように痒くも臭くもない。もっとコストダウンして、骨折治療に広く使われてもよいと思う。

20世紀初頭に開発されてから、幾多の失敗を乗り越えて改良を続けてこれた先人達の努力があったからこそ私は助かった。実用化されるためには、軽くて強度のある合金、体内に長期間留置しても感染を引き起こさない螺子、抗生物質等々の開発という医学に限らない人類の英知の蓄積も必要であった。同じ時代に生まれ、同じような怪我をしながら、満足な治療をしてもらえず切断するしかないカンボジアの地雷被災者のことを思うと、平和で裕福な時代の日本に生まれたことをありがたく思う。自分が10年もの間、絶望することなくやってこれたのは、いつかは完全な足になるという将来への希望があったからこそだ。世界中の人々が等しく文明の恩恵を受けられるような世の中になることを祈ってやまない。

オーソフィックス式に限っていくつか注文をつけると……

- ・固定器以外の場所に螺子を刺入する際にアダプターをつけたりレジンを用いていたが、いずれにしても軋む音が絶えず、レジンも割れ、螺子が緩んだ。アダプターは改良すべき。
 - ・固定器をもっと体に近づけることはできないか(極太のスポンを履きたくない)。
 - ・螺子が長いので、螺子の頭が固定器の外に露出し、スポンがすり切れて穴が開いた。固定器そのものも必要以上に長かったため、足の甲に接触し非常に苦痛であった。患者のサイズに合わせた螺子・固定器を準備することはできないか。また、固定器の内部に螺子の頭を納める工夫はできないか。
- 改良されても、試すことができないのが残念である。

今となっては怪我をしなかったと仮定して、現在の自分を考えることはできない。この世に生まれ落ちた時から決まっていた運命だと思っている。学生の頃に怪我をしていたら、大野先生との出会いをきっかけにブラックジャックのように医者を志したかもしれない。いろいろと後れをとったが、そのことを惜しいとは思っていない。

加害者を恨むつもりもない。普通の人ができないようなことを経験させてもらったし、いろいろな人と巡り合え、充実した10年間をすごせたと思っている。医学雑誌に載っている悲惨な事例と比較すれば、私は幸運なケースである。負傷した箇所は下腿部のみで、自転車で鍛えた太い筋肉が幸いして神経も動脈もやられなかった。後遺障害もほとんどない。毎朝、起きて立ち上がり、足があること、生きていること、そして生かされたことへの喜びを噛みしめている。

大野先生をはじめ病院の方々、家族、会社関係者とりわけ長期入院中の私を温かく見守ってくれた上司・同僚、友人達、保険会社の担当者……いろいろな方のお世話になった。改めてお礼を申し上げたい。手術後、麻酔が切れた後もがき苦しんでいる私を、夜遅くまで見守ってくれていた母の手の温もりは一生忘れられない。抜釘して早2年たった。苦しかったこと、辛かったことの記憶は薄れつつある。松葉杖のタコなど、とうの昔に消えてしまった。それでも、傷だらけの足を見ると、事故の時のこと、オベ室の光景、本当に治るのかと絶望しかけた頃のことを思い出す。

足に負担をかけられない私に残された数少ないスポーツは皮肉にも自転車だ。自転車で怪我をしたことを知っている周囲は「危険だからやめろ」と忠告する。それでも私は自転車に乗りたい。風と日差しを感じながら仲間達と峠道を走りたい。上の写真は、今年の夏、妻に車で伴走してもらい何年ぶりかで奥多摩へ行った時のものである。チームジャージに身を包み再びレースに出場する日を夢見て。

最後に、事故の知らせを最初に受けて一人で遠くの病院まで駆けつけてくれた高齢の祖母、孫の結婚と完治を見届けて今年の夏に天国へ旅立った大好きだった祖母の冥福を祈りつつ筆を置きたい。

私の闘いの記録をこのような形で残す機会を与えていただき有り難うございました。(株)東機質と大野先生の今後ますますのご発展とご活躍をお祈りいたします。

創外固定法とは、受傷部位から離れた位置で骨折部を挟んで骨に数本のピンを刺し、ピン同士を体外で固定する方法のこと。骨折が治癒したのち、ピンから器械を外し、ピンを抜く。

(* 1) あらかじめ骨折部を挟んで骨にピンを刺入しておき、レジン(粉末と液体を重合すると固まる材料)が凝固する前に、ピン同士を体外で連結させる創外固定器のこと。

(* 2) 固定器(本体)を操作して骨折部に生理的圧迫を加えることで、骨折の治癒を促進する創外固定器のこと。

私の中のアフガニスタン

Chris Steele-Perkins

1994年、「国境なき医師団」と共に初めてアフガニスタンを訪れてから、私はどうしてもなくこの国に惹きつけられてしまった。それほど印象を残さない土地もあるのに、こんなにもその魅力が身体の中にしっかりと染みこんでしまう土地があるのはなぜだろう。とにかく、アフガニスタンとその土地に住む人々はウィルスのように私の血の中に潜り込んでしまった。そして私はその後、3回もこの地を訪れることになった。私がいつも目を奪われるのは、<中流階級・英国人・男>である自分にとって馴染みの生活やスタイルとはかけ離れたものだ。そして私は写真という道具を持って、こういう「アナザーワールド」を探検する。そしてアフガニスタンはまさに「アナザーワールド」だった。ワイルドで、中世的で、残酷な国。巧智にたけ、美しく、優雅で、寛大で風変わりな人々。写真集『アフガニスタン』の中で私はこう書いた―「アフガニスタンに無関心でいるなんて無理だ」。この国の魔法、この土地の狂気も、どんなクールな態度も突き破ってしまう。この土地に足を踏み入れたことがあって、その出会いに心をゆすぶられなかった人は私の周りにはいない。

最近のアフガニスタンの情勢は、私の作品に新しい今日性を与えた。私のこの国に対する興味や関心が、今や全世界の人々と共通するものになったからだ。以前はアフガニスタンという国の存在を知らなかった人も、今は知っている。アフガニスタンがあることは知っていたけれど、どこにあったか知らなかった人も、今は知っている。けれども、この土地についてきちんとした知識を持っている人はほとんどいない。

人々がアフガニスタンと聞くと、問題の多い地域だという。そう、確かにアフガニスタンは長い間問題を抱えてきて、今はもっとひどい問題を抱えている。当然、マスコミの報道はこの「問題」に焦点を当てている。それがジャーナリズムの本質なのだ。そもそも私がアフガニスタンに初めて行ったのもこのためだった。でも、私はそういったトータル、戦争、破壊...そういったものを越えたその先を見たい。もっと広く彼らの文化を写真に捉えたいと思った。人々が働き、生活を営む様子、一年が過ぎていくリズム、彼らの喜び、彼らの悲しみ。単に戦争報道のステレオタイプを繰り返すのではなく、この国の人々

の全体像を描き出したいと思った。

もちろん、戦争とその直接の結果である破壊、悲嘆、苦痛を無視することはできないし、無視することはしなかった。でも、私は平和な地域も旅してみたかったのだ ― この国には平和な土地だってたくさんある。そしてそういう土地の写真を撮った。

今、アメリカと西側諸国はアフガニスタンに介入し、そこに住む人々はさらに辛酸を味わっている。すでに廃墟だった町は引き潰され、人々は荒れ果てた家を捨てて逃げ出さなければならない。アメリカは1979年にも、ソ連のアフガニスタン侵攻に対抗するためこの国に介入した。そして、アフガン人たちがソ連に反対するイスラム勢力に武器を与え、訓練を施した。この中にはかつての盟友、オサマ・ビン・ラディンもいた。ところが、目的が達成され、1989年にソ連が屈辱の中撤退すると、アメリカは共に戦ったアフガン人とイスラムの戦士たちに背を向けてしまった。ムジャヒディンこそが、何十万ものアフガン人の命を犠牲にしながらも、最新兵器を備えたソ連軍を打ち破ったというのに。アメリカ人は、もはや用済みとなった友には冷たかった。これでは憎まれても不思議ではない。アメリカ人が彼らに残したのは権力の空白だった。ソグイットと戦うために団結したムジャヒディンは今や互いに権力を巡って争い、混乱状態に陥ってしまった。

この時代の混沌とした状況が、今アメリカが戦っている敵である原理主義集団タリバンを頭を招く土壌となった。タリバンは平和に飢えていた民衆に平和をもたらすことを約束した。タリバンの「神の戦士たち」を歓迎した人は多かった。タリバンは初めてのうちはある程度の平和と安定を実現したからだ。隣国パキスタンは彼らを支持し、しかもアメリカも同じ態度をとっていた時期があった。しかし、タリバンの極端な政策は、彼らが政権をとる前の混乱状態と同じく耐え難いものとなっていった。結局、宗教的原理主義に基づく暴政が混乱と無秩序にとって代わっただけだったのだ。タリバンは西側諸国と断絶し、西側諸国もタリバンとの交渉を絶った。そしてアフガニスタンはテロリストの温床となった。アメリカがソ連と戦うために訓練し、そして「自由の戦士」と呼んだ同じ人々が、アメ



クリス・スティール＝パーキンス / Chris Steele-Perkins

1947年、ビルマに生まれ、49年イギリスに移住。2つの大学で化学と心理学を学ぶ。在学中から学生新聞の写真家兼ビクチャーエディターとして働き、71年ロンドンに移りフリーランスとして活動を開始する。バングラデッシュを長期取材したのち、大学で写真を教える。77年イギリス美術協会の写真委員に就任。79年よりマグナムに参加、82年に正会員となる。社会問題を映像によって訴えることを活動の主体にしており、オスカー・バーナック賞や英国で最も優秀なフォトジャーナリストにおくられるトム・ホプキンソン賞を受賞している。89年、ロバート・キャバ賞受賞。近年は、小型ビデオカメラを駆使して、ドキュメンタリーの分野に進出している。95年より98年まで、マグナムの会長を務めた。現在、マグナム東京担当副会長。2000年5月に写真集『アフガニスタン』（仏語版）を出版。在ロンドン。

リカをソ連とはまた別の帝国主義者と呼び、反旗を翻した。帝国主義者・アメリカはサウジアラビアの聖地を武器で汚し、イスラエルを支持しパレスチナ人を虐げ、パレスチナの聖地をも汚した。自由の戦士たちの中にはこのように考える者も少なくない。

アフガニスタンが安定した、そこそこ豊かな国として立ち行くように手を貸す努力を、西側諸国が真剣に行っていたらどうなっていたか。私たちは想像するほかにない。うまくいったかもしれない。アフガニスタンは、かつて学問と芸術が栄え偉大な伝統を持つ素晴らしい国だった。その姿を何らかの形で回復することができたかもしれない。もしアメリカがアフガンの友に背を向けなければ、タリバンが権力を掌握したのだろうか？ビン・ラディンの安全な隠れ場所になったのだろうか？9月11日の悲劇は起こったのだろうか？

過去を変えることはできない。私たちにあるのは現在と未来を夢見ることだけだ。アフガニスタンの未来とは何だろうか？アメリカは北部同盟が権力を回復するシナリオを考えているらしい。しかし、北部同盟といったら腐敗と内部紛争で結果的にタリバンの台頭を許した張本ではないか？北部同盟にできることはタリバンと同じだ。西側諸国はアフガン人たちに惜しみない援助や様々な支援を申し出ている。しかし、ビン・ラディンに破ったその後には果たして約束は守られるだろうか？アフガンの人々はこのように約束をそのまま素直に受け入れるだろうか？力の政治に翻弄されてきた人々が、慈悲深い神の清らかな手を求めるのは当然ではないだろうか？

初めてアフガニスタンを訪れたとき、片足自転車レースを観に行った。私の目にもそれは異様に映った。でも、私はすぐに理解した。地雷

■マグナム・フォト

1947年、ロバート・キャパの発案で、アンリ・カルティエ＝ブレッソン、ジョージ・ロジャール、デビッド・シモアらが設立した、会員が出資して運営する写真家の組織。当時は、雑誌『ライフ』に代表されるグラフィジャーナリズムの最盛期であったが、作品が雑誌に掲載される際、編集者によりトリミング、不正確なキャプションをつけられることが当たり前に行われていた。マグナムは、このような事態を防ぎ、写真家の権利と自由を守るために創設された。なによりも、写真家自らが自分のネガを管理し、著作権を保持すること、そしてそれを世の中に認めさせたということ、は、写真の歴史において非常に画期的なことであった。1997年に創立50周年を迎え、創立当初の精神は今なお健在である。

■写真集『アフガニスタン』

日本語版が、晶文社より2001年12月上旬に刊行予定。
お問い合わせ：フォト・ギャラリー・インターナショナル
〒108-0023 東京都港区芝浦4-12-32
TEL：03-3455-7827 FAX：03-3455-8143
E-mail：info@pgi.ac

■参考書籍『アフガニスタンの風』

ドリス・レスリング著／加地永都子訳
晶文社より刊行（一般書店扱い）

長年アフガニスタンの救援運動に関わってきた現代イギリスを代表する女性作家による、アフガニスタンの戦争を内側からつづったレポート。

の爆発で片足を失った人の数がそれほどまでに多かったのだ。レースは生き生きとした楽しいものだった。人々は自分を哀れむことなく、「生」を謳歌していた。だれが優勝したかは分からない。勝ち負けを気にする人はいなかったと思う。レース後、人々は近くのモスクに集まった。そこで祈り、詩を朗読した。アフガン人は花を愛するように詩を愛する。私は後でテレビの短編ドキュメンタリーを制作するため、何篇かを録音した。

20歳くらいの若い男がマイクにいざりよった。

戦争は私から両足を奪った

今私に残されているのはこの両手

私一人だけではない

足を失った人 手を失った人

昼も夜も私は嘆き続ける

平和は再び訪れるのか

この国が灰の中から立ち上がるのを見たい

もう墓を掘るのはいやだ

でも私たちにできることは何もない

神よ これ以上の破壊から私たちをお救い下さい

神の御名において 神の御名において 神の御名において

もう戦いにはつかれた

戦争のことは忘れて 平和について語り合おう

今一度 幸せをとりもどそう

country has become shared by the whole world. People who never knew Afghanistan existed certainly do now. People who knew it existed, but never knew where it was, do now. Yet people still know so little.

What people do know about Afghanistan is that it is a troubled place, and indeed it has been for a long time, and is further troubled now. Inevitably the trouble was the focus of most reporting; that is the nature of journalism. It is what first brought me there too. But I wanted to look beyond the troubles, the war, the destruction, and photograph the wider culture: to look at the way people worked and lived their lives and the rhythms of the year. To look at their joys as well as their sorrows. To try to build a picture of a whole peoples, not simply to reinforce the stereotype of war.

I could not ignore the war and its immediate consequences of displacement, sorrow and pain, and did not do so, but I also wanted to travel in the peaceful areas - for there were many peaceful areas - and photograph there too.

Now America and the West have intervened in Afghanistan and brought more suffering on the people there; more destruction on the existing destruction; driven more people from their deserted homes. America intervened before in 1979 to counter the invasion of the Soviet Union. Then they had armed and trained the Afghans and other Islamic opponents of the Soviets - including their old friend and ally, Osama Bin Ladin.

Then, once their purpose was over, and the Soviets withdrew in humiliation in 1989, the Americans walked away from their friends and heroes, the Mujahadeen, who had defeated the Soviet war machine at the cost of hundreds of thousand of Afghan lives. The American walked away from their friends for they were no longer useful to them. Do we wonder that some people do not like them? They left a power vacuum in which the Mujahadeen, who had been united in fighting the Soviets, now fought amongst each other for power, creating chaos.

The chaos of those times laid the groundwork for the rise of the Taliban, the fundamentalist movement that America is now fighting, for the Taliban offered the precious promise of peace to people who desperately wanted it. Many welcomed these religious warriors, for indeed they did, initially, bring some peace and stability. Neighboring Pakistan welcomed them and supported them and so, in the beginning, did America. The Taliban's extremist ways were to become as unpalatable as the chaos that they claimed to replace. The tyranny of religious fundamentalism replaced the tyranny of anarchy. They isolated themselves from, and were isolated by, the West. They became a haven for terrorists. The people that America had trained to fight the Soviets and called Freedom Fighter, now turned on the Americans as imperialists of a different kind from the Soviets. Imperialists who desecrated their holy islands in Saudi

Arabia with their weapons, who desecrated the holy lands of Palestine with their support of the Israelis in crushing the Palestinians. That is how some of the Freedom Fighters, came to see it.

We can only speculate as to what would have happened if the West had made serious efforts to aid and rebuild Afghanistan as a stable and reasonably prosperous country. It could have been done. Afghanistan had a great tradition for learning and arts, a great culture, which could have been rebuilt in some form. If America had not walked away from its friends would the Taliban have come to power? Would Bin Ladin have found safe haven there? Would Sept 11th have happened?

We cannot change the past, we only have the present and the dream of the future. What is the future for Afghanistan? The American seem to see it in terms of returning the Northern Alliance to power. But the Northern Alliance are the very people whose corruption and infighting brought the Taliban power. They have nothing to offer but more of the same. Will the West give all the promised aid and assistance it now offers to lavish on Afghanistan once its purpose of destroying Bin Ladin is over? Will it really keep its promises? Can the Afghan people be anything but cynical over these promises? Can it be any wonder that people so damaged by the politics of power look inward to seek the pure hand of a merciful god?

On my first visit to Afghanistan I went to a one legged bicycle race. It seemed a strange event to me, but then I realised how many people are one legged due mainly to land mine explosions. It was a joyful occasion, a rejection of self-pity for an affirmation of life. I don't know who won, and I don't think any one cared. Afterwards people moved to a nearby mosque. They prayed, they read poems. Afghans love poetry, as they love flowers. I recorded some as I was filming for a short documentary I was making for television. A young man, maybe 20 years old, limped up to the microphone,

This war has taken my legs

Only my hands remain to me.

Like me there are many others;

Some without legs, some without hands,

Day and night I cry for what has happened.

I ask if peace will ever come again?

I want this country to rise from its ashes.

We do not want to dig more graves

But we are powerless.

God save us from further destruction.

In God's name, In God's name, In God's name,

We are tired of this war.

Let us forget war and speak of peace.

Let us be happy again.

I was drawn to Afghanistan after having visited it for the first time on assignment for Medecins Sans Frontieres(MSF) in 1994. Who knows why exactly one place fascinates and absorbs you and another leaves you relatively indifferent? All I know was that Afghanistan and its people got into my blood stream like a virus and drew me back there again three more times.

I have always been fascinated by that which is different, far removed from the life and ways I know as a middle-class Englishman. Photography is my tool for exploring these different worlds, and Afghanistan was a very different world: wild, medieval, cruel, clever, beautiful, gracious, generous and extraordinary.

In my book, Afghanistan, I wrote - it is impossible to be indifferent to Afghanistan. Its magic and madness rip through any posture of detachment. I know of nobody who has been there who does not have strong feelings generated by the encounter.

Recent events in Afghanistan have given my work there a new relevance, as my interest and concern with that

Chris Steele-Perkins 23. 10. 2001

出会い (20)

禅とキリスト教

- 老博士の涙 -

奥村 一郎

本誌『Vitalite』Vol.21 「真実一路」においてとりあげた「托鉢と荷車」のテーマはあたかも禅の公案ともいえる興味深い難問であることから、今またあらためてとりあげることにした。読者の所感をいただければ幸いである。

「老博士の涙」と題された知友西村恵信教授(京都花園大学学長)の興味深い一文を再度拝借させてもらう。

要点を記すと、「托鉢と荷車」という話。もう30年以上も遡ることだが、当時、機峰峻烈でその名を知られた禾山^{がさん}禅師が、ある日、数人の雲水と托鉢に出られたときのこと。途中、坂道にかかったところで、重い荷物を山ほど積んだ車がその坂を登りかねている。そこで、1人の雲水が托鉢の列からそれて、その荷車を後ろから押してやった。とそのとき、托鉢中めったにふりかえることのない老師がそれに気付かれるとさっさとひとりに寺に帰ってしまった。そして、「ただちに、彼を下山させろ」と命じられた。「修行者ともあろうものが、人の車などに気を引かれてどうする。そのような無道心者は修行する資格はない。ただちに、叩き出せ!」と言われた。しかし、下山してしまえば最後、門宿という罰をうけたまま、山門のところで座禅をして貼り続けてやっと独参だけ許された。

ところで、この逸話を、カトリックの中でもよく知られていた原田祖岳老師がその自叙伝のなかで絶賛しておられるのを読んで、一層共感を深められたのが西村先生だった。「実に実によい話ではないか。こう話しても涙がでるよ。師家もえらいが、修行者もえらい。これだけの親切な師家と、熱烈な求道者が現代果たして何人ありや。恐らく皆無ではなからうか...ああ!？」

ところで、当時、西村先生は、米国に留学、プロテスタントのクエーカー研究所に滞在しておられたので、早速、この素晴らしい禅修行のエピソードをクエーカーの人達に話された。だが、その反応は全く予期しないものであった。それこそ、1人の例外もなく、その話を全然理解せず、それどころか、困っている人を助けることこそが宗教者のとるべき道であり、理由の如何にかかわらず、その行為が咎められたり、罰せられたりすることは不可解であると反論された。更には、自己の修行のために隣人を顧みないような禅者のやり方は全く宗教的などとはいえない、と厳しく批判さ



奥村 一郎 / おくむら いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。

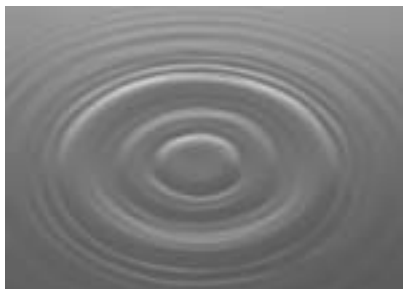
著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)など多数。

れた。まさに禅キ衝突という思いがけぬ体験は、次にくる大拙先生との出会いが、西村先生自身にとって、貴重な開眼の機となる。

その頃、久し振りに帰国された大拙先生を囲んでの集いの折、西村先生はこの極めてパンチの効いた話を食卓で披露された。90歳を越えられた大拙先生は、じっと聴いておられたが、話が終わると、耳から手を離し、うつむいてしまわれた。気分でも悪くなられたかと同じびっくりしていると、先生は目頭に手をあて、感涙を抑えておられた。やがて口を開き「いや、そんな筈はない。そんな筈はないんだ。いくらキリスト教のものでこの禾山老師の慈悲が分らんわけではない」と、西村先生の話を強く否定されたという。一体、そのときの、老博士大拙先生は何を感じられたのであろうか。禾山和尚の慈悲の鉄拳に心を打たれたのか、また、原田老師との深い共感であったのか、あるいは、真実一路の道に徹する禅の修行を解せない浅はかなキリスト者にたいする悲しみであったのか。更にまた、先生ご自身の無功德行への反省であったのか、今はもう確かめようがない、と西村先生の文は結ばれている。

「托鉢と荷車」という、たまたま、街の一角で起きた一瞬の小さな出来事が、その後、数年にわたって広がる波紋を作り出した意味深い話題である。

鈴木大拙先生は同時代の著名なカトリックの神秘神学者トーマス・マートン(Thomas Merton)とも親交があり、中世の神秘主義を代表するエックハルト(Eckharts)についても関心をもたれ、それについての著作もある。長らく米国におられたことから、キリスト教についての確かな学識をもたれていた。勿論、禅学の道に生き抜かれた巨匠であっただけに、キリスト教についての批判的な記事も折に触れてみられた。しかし、上記の逸話を結ぶ「老博士の涙」には、キリスト者への共感を含む温かい理解が読み取れるのではなからうか? というのも、先生も熟読されていたに違いない



聖書には、上記の逸話に酷似する興味深いエピソードがある。「マルタとマリア」という2人の姉妹についての話である。

一行とともにイエスはある村に入った。すると、マルタという女が、イエスを迎え入れた。彼女には妹マリアがいた。マリアは主の足下に座ってその話を聴いていた。マルタはいろいろなもてなしのためせわしく働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、私の妹は私だけにもてなしをさせていますが、あなたは、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」。主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。必要なことは唯一つだけである。マリアはよいほうを選んだ。それを取り上げてはならない」。

(ルカ第10章：38 - 42)

マルタの咎めを退けてマリアを弁護するキリストは、まさに禾山禅師。食事の準備をするマルタは、荷車を押す雲水。キリストは、手伝うのはいけないといっているのではない。「必要な唯一つのもの」を見失うなど、キリストは戒める。禾山禅師も人助けが悪いといっているのではない。「本立って末生ず」、とか「本末転倒」という戒めの諺もある。

事実、まだ十分「脱自」の境地に達していないなら、せっかくの善行も隠れた自己満足になってしまう。そこを老師もキリストも見抜かれていたのかもしれない。

あとで、西村先生は面白いことをいわれた。「まだ悟ってもいないのに車を押すような奴は、地獄に行け！ 悟ったあとに、車を押さないような奴も地獄に行け！」。これも、ひとつの名(迷)答かも？ 未熟な雲水の親切は、いわば、未熟なマルタの不平と同じということである。

なぜ、叱られたかも分からないままに、「この師のみ」に従うしかないという確信に徹した雲水の心は、イエスの傍らにいる妹マリアへの女らしい嫉妬もまざったマルタの愛着にも通ずるものがあるのではなからうか。そのときのマリアの沈黙において、誰にとっても「必要な唯一つのもの」があらわにされた。言葉では表わせないままに。智徳兼備の老博士の涙には、この「時間と永遠」をつつむ人間の魂の深淵が映しとられていたのではなからうか！

P.G.I.のお知らせ

「プラチナプリントの輝き」展 The World of Platinum Prints

2002年1月10日(木) - 2月28日(木)

プラチナプリントは1873年に発明された写真印画法のひとつです。現在活躍している内外の写真家たちがその特有の豊かな調子を活かしてそれぞれに個性的に表現したプラチナプリント作品は、ノブルな輝きによって写真そのものの美しさを引き出しています。出品作家10名、約40点を展示します。

小畑雄嗣 写真展 BIRD OF PARADISE : MADEIRA

2002年3月5日(火) - 29日(金)

2002年1月より営業日・営業時間が変わります

フォト・ギャラリー・インターナショナル

東京都港区芝浦4-12-32 TEL.03-3455-7827 FAX.03-3455-8143
JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分 [入場無料]

【営業日】月 - 金 【休館日】土・日・祝日

【営業時間】11:00 - 19:00

* P.G.I. についての詳しい情報はホームページ(<http://www.pgi.ac>)をご覧ください。

表紙の写真



写真：クリス・スティーヴン・バーキンス
アフガニスタン、1998年
写真提供：マグナム・フォト東京支社

アフガニスタンのタリバン政権は、戒律の極めて厳しいイスラム原理主義を信奉する。その影響を最も受けているのが女性たちだ。

就労禁止、教育禁止...そして、外出時のブルカの着用。ブルカとは、目の部分だけがメッシュになっている頭からつまさきまでをすっぽりと覆うベールのことである。ブルカを着用して歩く女性の姿は、そのままタリバン政権の象徴のようだ。

20年以上にわたる内戦と過酷な差別政策の中で、女性たちは精神的・肉体的にも傷を負いながら生きている。

米軍の介入により力を取り戻した北部同盟の手で、首都カブールが陥落した。厳しい統制から解放された市民は、音楽を流し歌い、男はひげを剃り、女はブルカを脱いだ。しかし、これが本当の平和だと信じる市民は少ない。

ブルカを着用した彼女の姿は、バーキンスの乾いた視線の中で、なお強烈な存在感を放つ。メッシュの奥にある彼女の視線の先に、真の平和が見えてくることを願ってやまない。

(編集部)

MRIをナビゲーションとして 利用しながら進める画期的な 脳腫瘍の手術

—重要な脳機能保持のため局所麻酔で行った脳腫瘍手術の話—

米川 泰弘



米川 泰弘 / よねかわ・やすひろ

1939年、三重県津市生まれ。64年、京都大学医学部卒業。京都大学医学部助教授、国立循環器病センター・脳神経外科部長などを経て、93年より、チューリッヒ大学脳神経外科主任教授。

縫合の最後の一針をきっちり結び終えてこの手術が完了した時、執刀者である私を始め手術室内のスタッフの誰もが、このルクセンブルクからの患者G女史(34歳)の、術中を通してなんともけなげで一生懸命であった協力の態度に深い感銘を受けていた。彼女は局所麻酔による脳外科手術という大変特殊な状況下でもひるまず、手術を成功させたいという一心で終始その強い意志を保ちつづけて積極的に私達に協力してくれたのである。

今回は印象的な患者であったこのG女史を例に挙げて 1. 磁気共鳴画像装置(以下MRI)を術中にナビゲーションとして利用しながら進める手術について 2. 局所麻酔により、言語機能をモニターしながら行った脳腫瘍の手術について話を進めていきたい。

G女史の場合、話している最中に突然言葉が途切れてしまうという発作がまず出現した(注: 脳腫瘍の最初の症状がこのように様々なタイプの癲癇発作の形で発症することは比較的多く、全体の約30%にも達する)。彼女の発作の根源は左前頭葉言語中枢の近くにできた比較的良性のグリオーマ(注: 神経膠腫といって神経組織の細胞の一部が腫瘍化したものと考えてよい)であった。彼女の本国ですでに手術がなされていたが、再発して当チューリッヒ大学脳神経外科に来院したのである。腫瘍摘出の際取り残しが少しあったため上記の発作が再発したのであるが、この残存腫瘍の摘出を完全にするために上記のごとくMRIを術中に利用しながらかつ局所麻酔で手術を行った。

今日では非常に精密で高度な画像診断装置が開発され、医療の進歩を支えていることは周知の事実であるが、中でも磁気を利用することによって脳の断層・立体画像が得られるMRIは最先端をいく装置の一つである。MRIはこれまで術前の診断や術後の腫瘍除去状況の確認に使われてきたが、最近では脳外科手術をより安全で完全なものにする目的で、執刀者を助けるナビゲーションの役割を果たすものとして術中にも用いられるようになった。これがオープンMRI(以下OMRI)と呼ばれる装置である。当科では、1995年にヨーロッパで最初にこの装置を導入した。世界ではボストンのマサチューセッツ総合病院(MGH)に次いで2番目の導入である。2000年にはさらにもっと進んだ機種、今までのものに比べて格段に小型のOMRIをもう1台、これまたヨーロッパの他の医療機関に先駆けて購入し使用している。

脳腫瘍摘出手術の際最も重要かつ基本的課題は何か? それは健全な脳神経組織は可能な限りそのままの状態で残し、腫瘍で侵された組織は可能な限り完璧に取り除くことである。だが実際には、それは大変難しいことなのである。特にグリオーマでは、その末梢周辺部では腫瘍組織が正常の組織とからまり合うというか、それに浸潤して広がっていて健康な組織と区別がつかないことが普通なので、はっきりした境界というものが確定できない。どこまで腫瘍を取るかは手術顕微鏡下で、局所の色、硬さ、血管の分布の程度などを見て総合判断して実施にあたるのである。したがって腫瘍摘出の程度は術者の経験によることが多い。腫瘍の取り方が少なすぎると再発が早く起こるし、あまり取りすぎると正常の神経組織をも摘出することになる。G女史のケースのように言語中枢に極めて近接してできた腫瘍を最大限に除去したい場合、できるだけ正常機能を温存するため、麻酔は局所のみにとどめ患者の意識は保った上で、患者に様々な質問に回答して話してもらうことにより、言語機能をモニターチェックしながら腫瘍切除を進める。それと並行して途中で切除作業を何度か中断し、OMRIで腫瘍の画像を撮影してその取れ具合を確認するのである(目では見分けにくい脳内における異なった組織構造の識別や、手術で到達すべき、あるいは、した箇所を指し示すMRIの能力が威力を発揮するのである)。つまりOMRIには術者の経験を補う機能があるといえる。この強力な助っ人を得たことにより、脳外科手術の歴史には新たな展望が開かれたとすることができる。

とはいえ、OMRIにはメリットばかりがあるわけではない。磁気共鳴画像装置という名が示す通りMRIは「磁場」という、手術室の他の機器にとっては強烈なる妨害要因を内に備え持っているの、残念ながら磁場の強いタイプのMRIは手術室では使用できず、比較的低磁場のMRIを用いることになる。磁場の強さは画像の鮮明度と結びつくのでこの点の妥協を余儀なくされる(通常の診断用のMRIでは1.5テスラの磁場があるが、手術室のOMRIは0.12なので、やはり術後には鮮明度のより高い診断用MRIで成果をもう一度チェックしている)。また磁場の存在のせいで従来の手術器具は使用できないので、新たにこれに対応した素材の特殊な手術器具の開発が必要となる。小さな手術器具だけでなく手術用顕微鏡、麻酔の機器



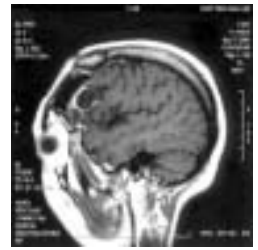
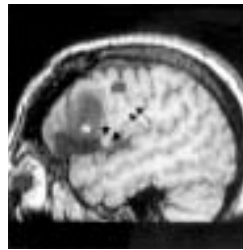
OMRI、手術用顕微鏡を使用しての手術の情景。

矢印がOMRIの本体でこの部分は上下の移動が可能。手術中は下げて手術の妨げにならないようにし、撮像する時はこの部分を上げて術野の頭部をサンドウィッチのようにはさむ。イラストはチューリッヒ大学脳神経外科専属のイラストレーター、P.Roth氏による。

なども特別なものが必要になる。当科では、同じチューリッヒにあるスイス連邦工科大学 (ETH) や医療機器専門会社と共同でこの方面の研究開発もバイオナ的に進めており、それが今世界各地で使われている。最新の装置が導入されればそれで全てがよりうまくいくというものではなく、次にまたそれに伴って起こってくる諸問題の解決に迫られるので、実はそれから大変なのである。

ところで一般に「脳の手術」と聞くと、全身麻酔で行われ、最初から終わりまで患者の意識はなく、痛みも感じないまま済まされることを想像するであろう。しかし局所麻酔による脳外科の手術は何も新しい方法ではなく、癲癇に対する手術の一環として1950年代には確立している。それが近年再びクローズアップされている。局所麻酔剤で痛みを感じる頭皮を麻酔して開頭すれば、その内側にある脳そのものには知覚神経が分布していないので麻酔なしでも痛みは感じられず、脳に侵襲を加えることは可能である。局所麻酔剤のリドカインに血管収縮剤のアドレナリンを加えたもので局所麻酔を施すと、その作用は僅に5-6時間は効き目を発するので、この時間内に終了する手術であれば局所麻酔を追加する必要はないのである(ただし脳と頭蓋骨の間にある脳を覆う脳硬膜には三叉神経が分布していて、手術操作が頭蓋底に近くなるほど患者は痛み、不快感を訴えるので、局所麻酔を浸潤塗布したり、軽い静脈麻酔を追加する必要がある)。こうした状況下にて患者の意識は失わずに清明なまま手術を施行する。大切な脳の機能(言語中枢、運動神経、視覚中枢など)を手術が原因で失ってしまうように、これらの機能を術中に念を入れてチェックしながら慎重にやっていくわけである。そのため患者の協力が手術成功の第一条件となる。そのコミュニケーションのもととなる言葉の問題も、これまでギリシア、イタリア、トルコなどの国から来た患者の場合でも、必要となれば当科の中でその言語を話せるナース、看護助手などの協力を得て支障なく対処することができた。

さてここで冒頭のシーンに戻りたい。何はともあれ読者の方々にも、G女史が手術中に置かれた環境を彼女の立場になって想像してみていただきたいのである。術野の頭皮が消毒された後、彼女の頭部は感染を防ぐため顔の部分を残して消毒した敷布ですっぽりと覆われるので、閉所におかれたのと同じ状態となる。5-6



今回の症例の術前(左)と術後(右)のMRI。

術前のMRIはfMRIと言って言語の検査をしながら撮ったもので腫瘍(※)が言語中枢(↑)に極めて近接していることを示す。

時間にも及ぶ長時間の間、局所麻酔なので手術の進行に伴うあらゆる操作の物音を耳にし、その間言語テストの課題を集中してこなし、さらにこのケースでは特にOMRIに伴う特殊な物音にも耐える必要があるのである。OMRIによる術中撮影には、1回の撮像に10分近くの時間が必要である。その間患者本人にとっては耳元で直接に響くラジオ波発信時のピーンピーンという音がかなり負担になる。この時間を短くすると、必要とするに充分な鮮明詳細な画像を得ることができないし、長くすれば手術時間が長くなり、患者の負担も増える。この術中撮影を数回繰り返し、その上その個所を切除したことを想定するために行われる(電気刺激のある時とない時両方の場合に)言語療法士が課する質問や課題に答えるのは本当に骨の折れるつらいことであつたと思う。G女史は家族で経営するホテルの持ち主であり、ドイツ語、フランス語、英語、イタリア語が話せるので、上述の検査中要求される言語で課題をこなしていた。例えば具体的に言うと、「あなたの朝起きてからの日常生活の様子を順を追って話してください」という課題を、その都度要求される言語に切り替えて話してもらうのである。彼女が話している間に、切除しようとする腫瘍の個所を電気刺激して、流暢に話している言葉の流れがストップしたり、乱れるかをチェックして切除範囲を決定していく。その他にも、数字を1から50まで順を追って声に出して数えたり、またその逆の順で言うことを要求されるのである。彼女はこれらの課題を多くの集中を妨げる要因にもめげず、次々とこなしてくれた。おかげで目的とする腫瘍の切除を言語機能を損なうことなく達成することができた。術後も模範的な患者であったG女史は術後一週間で退院、ルクセンブルクの家族のもとに帰宅した。

OMRIを利用する手術は、現在ではまだ手術施行上すでに述べてきたような種々の制約があるので、本当に必要なケースにしかならなければ行っていないが、近い将来もっと制約が少なくなり、なおかつ得られる画像の質が向上してくればもっと手軽に頻繁に行われると考える。この原稿が配布される頃に、チューリッヒで当科が主催する第1回の脳神経外科手術の術中画像に関する国際シンポジウムが行われているはずである(※)。

(※)開催日：2002年11月11-13日 <http://www.usz.ch/>より「Neurosurgery」の「Veranstaltungen/Events」の項にて案内しています。

遺伝子組換えぶどうは果たして 「進歩」といえるだろうか？

横山 弘和



横山 弘和 / よこやま ひろかず
1930年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。
95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイ
ン関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・シュヴァ
リエ・デュ・タートヴァン(利き酒騎士)叙任。現在佐多商
会業務室在籍。

ワインの専門誌『ワイン・スペクテーター』に、有名なワイン・ジャーナリストであるマット・クレマー氏(*)による寄稿文が掲載されました。表題は「未来との戦い(Fighting the Future)」。

遺伝子組換えぶどうの問題を含むワイン産業の「進歩」について問いを投げかけています。そこで今回は、「ソムリエの旅行記」をお休みして、ワイン業界においてぶどうを生産しワインを造る技術がどのように進歩したのか、そして遺伝子組換えぶどうをめぐる動きについて取り上げてみたいと思います。

何百年もの間たえずまなく続いてきた現代ワインインダストリーと呼ばれる産業の進歩は、他の様々な産業と同じように、20世紀に入ってから発展の速度が急激に早まります。今振り返ってみますと、20世紀も最後の25年間に特に際立った発展がみられます。それはわが国の飲料事業にも大きな影響を与えました。日本人がワインと親しくなったのは“^{戦後}”のことです。最初、国民1人当たりの年間ワイン消費量はわずかお猪口1杯でした。それが最近では、1人当たり2.5リットルにも達したと報じられています。

本来、良質なぶどうを育てるには、熟練した技術はもちろんのこと、運も必要としました。ぶどうが生育するほぼ100日間の天候が好都合なもので、運よく予定の時期に収穫ができることが条件だったからです。現在のように気象情報が行き届いていない時代、取り入れ直前の急激な天候の悪化は、一瞬にして1年間の労苦を無駄にしてしまいました。今では天候の変化を予報で察知し、早めに手を打つことも可能です。それがヴィンテージによるばらつきを抑え、年代による極端な品質の差を少なくしています。

技術面では、20年ほど前まではぶどう畑での労働はラバ(雄口バと雌馬との雑種)に頼らなくてはなりませんでした。現在では器械の導入により、動物ばかりが人手さえも少なくてすむようになりました。枝の剪定、刈り込み、手入れ、葉除き、殺虫剤の散布、さらに摘み取りも器械が移動して取り入れられ、人件費の削減に大いに役立ち、ワインの生産コストを大幅に下げることになりました。数多くの新しい道具も使われ始め、工場内でも大きな変化が起きています。発酵、ろ過、熟成などの工程で、木製の桶や樽に替わってステンレス製のタンクが多く使われるようになりました。その結果、

ぶどうの発酵時の温度を完璧に調整でき、失敗することなく、衛生的で応用のきくワイン醸造が可能となりました。工場全体がコンピューター装置で制御されているワイナリーさえ存在するのです。

しかしなんとといってもワイン造りに一番大事なものは、原料となるぶどうの品質です。畑に植えるぶどうの苗は果物として良質で、完全に健康でなくてはなりません。しかし、最近ワインの世界での「進歩」は原料のぶどうの品種改良にもおよび、遺伝子組換え問題が大きな話題となっています。

遺伝子組換えにより、病害虫や農薬などに強い性質を持たせた生物を総称して「遺伝子改変生物」といいます。生命科学の発展はめざましいものがあり、最近では遺伝子改変生物の国際取引も増え、欧米の企業は途上国で遺伝子改変生物の野外実験を行っています。しかし、それに伴って遺伝子改変生物が人の健康や生態系におよぼす影響が問題となってきました。そこで、生物種、生態系および遺伝子の多様性を保護するために1992年「生物多様性条約」が採択され、遺伝子改変生物が生態系に悪影響をおよぼさないよう、各国が一致協力する体制が築かれました。日本は翌年93年に批准しています。しかし、各国の政治的・経済的思惑が絡み、批准国の足並みが揃っているとはいえないのが現状のようです。

さて、冒頭でお伝えしたマット・クレマー氏の記事によりますと、遺伝子組換えぶどうの問題にもっとも率直な意見を表明したのが、フランス・ブルゴーニュ地方のワイン生産者たちでした。2000年7月、遺伝子改変生物に反対する宣言書が発表されました。それには、この地方でも有数の優れたワイン醸造家24人が署名し、この中にはドメヌ・ド・ラ・ロマネ・コンティのオベール・ド・ヴィレーヌ氏やメゾン・ルイ・ジャド社のピエール・アンリ・ガジェ社長の名前もあります。以下、マット・クレマー氏の記事を引用させていただきます。

*

この宣言書には「遺伝子組換えぶどうおよび遺伝子組換えぶどうを使用したワインは、ヨーロッパでの販売承認を未だ得ていない」、研究は「特に遺伝子組換えイーストの分野で非常に進んでいる」とある。遺伝子組換えに相当するのは次のようなものだ。

・酵素、抗菌性物質、および品種特有のアロマを強める物質を



畑の中を移動しながらぶどうを収穫するharvest machine。

分泌するイースト

- ・ハマキムシに抵抗性のある台木
- ・うどんこ病、べと病、黄色ウイルス病、フィロキセラに対する抵抗性をもつぶどう品種

素晴らしい。フィロキセラが治るって？ まさにぶどう栽培家の夢ではないか。

ところが、そう簡単にはいかない。ブルゴーニュ人は土地との結びつきが強いことで知られている。だからこそ、あれだけ多くの小さなぶどう農家が畑を持ち根をはっている。そしてここで、世界でもっともセンシティブな赤ワインの原料となるぶどう、かのピノ・ノワールが栽培されている。

しかし、ブルゴーニュ人が「進歩」をこれほど懸念する理由はそれだけではない。実は1970年代、80年代に自慢のぶどう畑をだいにしにしかけた苦い経験があるのだ。

当時、研究者の意見に従って、ブルゴーニュのぶどう農家は、昔から受け継いできたたくさんのピノ・ノワールの株をほんのわずかな新しい株と交換した。これが間違いのもとだった。収穫は大量だったが、独特の香りがすっかり失われてしまった。また、専門家たちのアドバイスを取り入れて、収穫期のぶどうの腐敗を防ぐために新開発の腐敗防止剤をたっぷりとスプレーした。しかし、数年間使い続けた結果、この高価なスプレーは使い勝手はいいものの、効果はすっかり薄れてしまった。肥料をたくさんやるといいというのでやってみると、ぶどうの木は膨れ上がり、土壌はカリウム過多になった。除草剤と防カビ剤の使いすぎの結果、土壌は無菌状態になった。

1990年代までに、ブルゴーニュのぶどう農家はこれは自殺行為だということに気付く。彼らは「進歩」に躍らされていたのだ。

なにより、ブルゴーニュは道徳を守ろうとする意識が強い。古い歴史を持ち、宗教が現代に息づく土地柄でもある。なんといってもカソリックの修道士と修道女が拓いた土地なのだ。今日のブルゴーニュ人も、何世紀も綿々として続くその強い絆を意識している。

科学者たちの太鼓判に乗せられ、新発明の道具の使いやすさに目をくらまされて、ブルゴーニュ人は一度は世界最高のぶどう畑の守護者としての節義を曲げてしまった。そして彼らはそのことを自覚している。



近代的なステンレス製タンク

これで、フランスでの遺伝子組換え原料をワインに使用することへの反対運動がブルゴーニュで始まった理由がお分かりだろう。ブルゴーニュでの議論は核心をついていった。2001年3月、フランスの他の地方のワイン醸造家たちもこの声に耳を傾けた。ブルゴーニュでの会議の後、Terre et Vin du Monde という組織が結成された。10年間の遺伝子組換え原料の使用一時停止の嘆願書に署名し、全国のぶどう農家、ワイン愛好家に支持を求めた。

さて、ここで問題だ。この動きは正しいものだろうか？ 普通にワインを楽しむ人々もこの大義のもとに参集一心の中だけでも一すべきだろうか？

筆者個人としての答えはイエスだ。遺伝子組換えにも未来はある。それは一部の人たちが主張するような「フランケンシュタインの未来」では必ずしもない。とはいえ、ブルゴーニュ人の「進歩」をめぐる最近の経験は、耳を貸すに値する戒めだろう。遺伝子組換え原料の使用一時停止嘆願書にサインしたブルゴーニュ人たちの言葉は痛烈だ。

「我々の職業の未来は、科学者、実業家、テクノクラートの影響や利益のもとで発展していくのではない。これが過去の経験が我々に与えた教訓である」

*

最後に、私が以前知り合った優れたワイン生産者から聞いた言葉に触れておきます。「自然で正直なワイン造りに近道はない」。私個人としては、ワイン産業の「進歩」は決して急ぐ必要はないと考えています。

(*) 25年もの長きにわたり、ワインと料理の著述に専念。代表作『ワインが分かる』は、世界中のワイン愛好家をうならせた名著。

ブルゴーニュへ、ようこそ

中世の地にはにぎわっているブルゴーニュへようこそ！
 極上の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、
 中世の建物の街並み、美しく広がる大地や、小さな村々、
 豊かな生命力はだの心(心)を感じさせる地方、
 それがブルゴーニュです。

お問い合わせ
 (株)近歩商会事務局 担当：岩沢
 Tel. 03 3582 5087

